

2008年3月1日 交流協会「2007年度第6回日本語特別講演会」講演レジュメ

誠実に聞き的確に反論する

ディベートの魅力

全国教室ディベート連盟理事長・金城学院大学副学長 二杉孝司（ふたすぎたかし）

【講演要旨】

ディベートは、思考の論理を鍛え、コミュニケーション・スキルを高めるための討論ゲームです。ゲームですから、ディベートは、普通の討論とはずいぶん様子の異なるルールを持っています。たとえば、論題に対する肯定・否定の立場は固定されます。討論の後半で「新しい論点」を付け加えることは認められません。発言時間は厳格に管理され、1秒たりともオーバーすることは許されません。初めは戸惑うものですが（すぐに慣れます）、しかし、このような非日常的な討論の仕組みが、トレーニングとしての教育効果を高めるのです。

ディベートをすると話すことが上手になる、と多くの人が思うようです。しかし、本当に上手になるのは聞くことです。相手の言うことをしっかりと聞かなければ、ディベートに勝つことができません。話すことも上手になるとは思いますが、それは聞き手のことを考えて話すようになるからです。ディベートの基本は、聞くことあります。

見た目の印象とはちょっと違う、こんなディベートの魅力をお話したいと思います。ディベートをご存じない方にもディベートの魅力を知っていただくために、中学生のディベートの試合をDVDで見たり演習を交えたりしながら、わかりやすく講演を進めるつもりです。

【講演の流れ】

- 1 演習 反論の2つのタイプ
- 2 ディベートを見てフローを取る
- 3 ディベートとは何か
- 4 ディベートで身に付くこと
 - A) ディベート固有の意義 / B) 反論の意味 / C) 外在的反論と内在的反論
 - D) 反論の体系的組織としてのディベート
- 5 ディベートの魅力

演習 反論の2つのタイプ

まずは、次の意見を読んでください。

私は、日本もサマータイム制を導入すべきだと思います。なぜなら、省エネができ、地球環境をまもることができるからです。

サマータイム制を実施すると、夕方が明るくなりますから照明需要が減少します。サマータイムに合わせて時計を年2回調節しますから、省エネに対する意識も向上します。財団法人省エネルギーセンターの試算によると、省エネ効果は約50万キロリットル、二酸化炭素の削減効果は44万トンになるそうです。

いまの時代、エネルギーを節約し、地球環境を保護することは何よりも大切なことです。サマータイム制を導入するだけで、二酸化炭素を44万キロリットル削減できるのですから、ぜひサマータイムを導入しましょう。

この意見には、次のような反論が考えられます。

昼間だって照明をつけているから、照明需要は変わらない。

サマータイム制を導入すると、明るいから帰りづらくなって残業が増える。

アフターファイブが明るくなって、レジャー産業が盛んになる。だから、エネルギー消費はかえって多くなる。

年に2回、日本中の時計を直すなんて、ものすごいコストがかかる。無駄遣いだ。

二酸化炭素を44万キロリットル削減するだけでは地球環境は守れないから無意味だ。

省エネルギーセンターはサマータイム制を推進しているんだから、そんなところの試算は信用できない。

ところで、この反論は、2つのタイプに分けることができます。

の反論は、はじめの意見の根拠を衝く反論です。これを内在的反論と言うことにしましょう。

の反論は、別の観点からの反論(意見)です。これを外在的反論と言うことにしましょう。

そこで、問題です。

の反論と同じタイプの反論(外在的反論)を、の中から一つだけ選んでください。

ディベートを見てフローを取る

ディベートとは何か

- 1) ディベートは、討論のゲームです。思考の論理を鍛え、コミュニケーション・スキルを高めるトレーニングを行うための、討論ゲームです。
- 2) ディベートは、次の4点で、一般の討論とは異なります。4つの特徴が相俟って、トレーニングの効果を高めます。

明確な判断を述べた論題があります。(たとえば「日本はサマータイム制を導入すべきである。是か非か」「日本は原子力発電を代替発電に切り替えるべきである。是か非か」)
論題が二つのチームを肯定側と否定側に分けます。
ルールに基づいて試合が行なわれます。
審判が、勝敗を決定します。
- 3) ディベーターには、コミュニケーションの責任があります。相手側・審判・聴衆に伝わらなければ、どんな議論も意味がありません。ディベートを通してコミュニケーションのスキルが身につくというのは、こういう意味です。しかし、注意して欲しいことがあります。ディベートを見ると、堂々と話していることばかりが目につきますが、実は相手の意見をしっかりと聞いています。相手の話を聞かないと、ディベートには勝てません。ディベートに固有の特徴は、話すことがうまくなることよりも、聞くことが上手になることにあります。
- 4) ディベートという討論の特徴は、論理を大切にすることにあります。したがって、自分の主張を述べるには、あわせて根拠を述べるが必要になります。相手の主張に反論するときも、その根拠を伴わせなければ審判は評価しません。双方の主張の根拠を相互に反論しあい、反論に耐えることのできた主張を、暫定的に(その試合において)正しいものとみなし、勝敗を決定するのです。
- 5) 論証ということに注目すれば、ディベートとは次のようなものだということもできます。ディベートとは、1つ1つの議論を積み上げ(崩し)、論題を肯定(否定)するものです。ディベートの目的は、主張の正しさを論理的に検証することにあります。
- 6) このような意味で、ディベートの本質は、反論にあると言えます。ディベーターは、積極的に「悪魔の代弁人」の役割を果たすことによって、議論の検証を行うのです。ディベートのルールは、公平に議論を組織するためにあるのですが、見方を変えれば、ディベートのルールは、相手が批判(検証)しやすいようにつくられているのです。

7) ディベートの主なルールは、次の通りです。

肯定側になるか否定側になるかは、通常、試合の直前にくじなどで決めます。

フォーマット(立論・質疑・反駁)にもとづき厳格にスピーチ時間が管理されます。

フィアット(政策主体は必ず政策を実行するという仮定)に基づき試合が進められます。

肯定側のプランは、論題を充当するものでなければなりません。

否定側は、カウンタープランを出すことができます。ただし、議論が複雑になりますので、いまはカウンタープランをとらず、否定側は現状維持の立場をとることにします。

立論で述べなかつた論点を反駁で提出することは、「新しい議論」として禁止します。

第1反駁で言わなかつた論点を第2反駁で提出することは、「遅すぎる反論」として禁止します。

肯定側の主張するメリットが、デメリットより大きければ肯定側の勝ち、そうでなければ否定側の勝ちです。引き分けはありません。

試合のフォーマット例 (ディベート甲子園・高校の場合)

	肯定側立論	6分
準備時間 1分	否定側質疑	3分
準備時間 1分	否定側立論	6分
準備時間 1分	肯定側質疑	3分
準備時間 1分	否定側第1反駁	4分
準備時間 2分	肯定側第2反駁	4分
準備時間 2分	否定側第2反駁	4分
準備時間 2分	肯定側第2反駁	4分

ディベートで身につくこと

A)ディベート固有の意義

- 1) ディベートを始めるとき、さまざまなことを期待してディベートを始めよう。たとえば、上手に話せるようになる、リサーチ能力がつく、論理的な思考力が育つ……と言ったことです。どれも、間違いではありません。たとえば、ディベートでよく使われるナンバリング・ラベリング・サインポスティング(要するにスピーチの構造を示すことば)を上手く使うと、それだけでスピーチは格段とわかりやすくなります。しかし、そのことだけならば、プレゼンテーションの方がよいかもしれません。必ずしもディベートでなければできないというものではありません。

- 2) もちろん、厳密に言えばディベートでなければ身につかないことなどないでしょう。しかし、ディベートだとより早く向上するという、ディベートの得意分野というものはあります。そういう意味で、ディベートに固有の教育的意義というものはあります。
- 3) 私は、「議論を整理する力」を育てることがディベート固有の教育的な意義だと思っています。ディベートは、反論を体系的に組織するものだからです。

B)反論の意味

- 1) 反論はとても大事なことです。なぜなら、反論に出合うことによって、私たちは、自分の意見の弱点を知ることができるからです。
- 2) 反論の意義は、私たちの目を理由(根拠)に向けてくれることにあります。ある意見に賛成するか反対するかは、本当はたいした問題ではありません。本当に大事なことは、その意見(主張)を支えているはずの理由(根拠)であり、その理由(根拠)と意見(主張)の整合性です。
- 3) たとえば、「JALの飛行機が事故を起こしたからANAの便に替えよう」と言われたら納得するでしょうが、「JALの飛行機が事故を起こしたからJALの便に替えよう」と言われても、なかなか納得できないでしょう。(もっとも、「JALの飛行機が事故を起こしたからJALの便に替えよう」という意見を整合的に解釈することもできます)
- 4) そうは言っても、反論には何となく嫌らしさがあるように感じてしまうのではないのでしょうか(「反論ばかりしていないで自分の意見を言え」などと言われてたりします)。しかし、本当は、すべての意見は反論なのです。誰も反対しないような意見は、意見としての意味がないからです。
- 5) すべての意見は反論だと言いましたが、最初に発言する人の意見も反論なのでしょう。実は、反論なのです。わざわざ意見を言うということは、潜在的な反対意見を想定しているからです(誰も反対しない意見は、意見を言う意味がないからです)。だから、最初に口火を切る意見でさえも、やはり、反論なのです。
- 6) 反論されたとき大切なことは、反論そのものと反論する人をはっきりと区別することです。反論した人が好きかか嫌いかで、反論に対する態度を決めることは、よくないことです(でも、実際にはよくあることです)。反論の内容をよく聞いて、納得できれば受け入れればいいのです。
- 7) 本当に大事なことは、その意見(主張)を支えている理由(根拠)です。他人から反論されて、あるいは自分で考えて、新しい理由(根拠)に気がいたら、自分の意見が変わることは、当然のことだからです。そういう意味では、「君子豹変」ということばは大切です。

C)外在的反論と内在的反論

- 1) すべての意見は、反論です。

- 2) 反論には、外在的反論と内在的反論があります。
- 3) 実りある議論をするためには、内在的な反論も外在的反論も必要です。外在的反論だけでは、水掛け論になります。相手の主張の根拠を検証してあげましょう(根拠は正しいか、妥当か)。内在的反論だけでは、視野のせまい議論になります。相手を取り上げなかった論点を、指摘してあげましょう。
- 4) ディベートでは、大まかに言えば、肯定側・否定側双方の立論が相互に外在的な反論になっています。そして、双方の反駁が内在的反論になります。だから、一つの論題について、バランスのよい議論ができるわけです。

D) 反論の体系的組織としてのディベート

- 1) 反論の意義は、私たちの目を理由(根拠)に向けてくれることにあります。そして、ディベートは、初めから立場が決まっていますから、理由(根拠)しか争うことがありません。ディベートでは、最初から理由(根拠)だけが問題になります。だから、ディベートを通して、反論する力を身につけることができます。
- 2) 事前に準備しなければ、説得力のある理由(根拠)を提出することは、できません。説得力のある議論をするために、試合の前に、「証拠資料」をリサーチします。資料にもとづき、立論をつくり、反駁の準備をします。そういう意味では、ディベートの試合は、当日までの準備で大部分は決まっていると言うこともできます。
- 3) ディベートは、ルールにもとづく非日常的な討論のゲームです。ディベートが、議論を訓練する場だからです。ディベートのルールは討論に多くの制約を与えますが、この制約が議論の力を育てることになります。たとえば、スピーチの時間に制約があるから、相対的に何が重要な論点かを選ばなければならなくなるのです。ディベートに限らず、どのようなスピーチにも、どのような論文にも、本当は量的な制約はあります(守らない人が多いですが)。
- 4) ディベートでの議論の目的は、論題を肯定(否定)することにあります。論題の是非に無関係な議論(初心者のディベートにはしばしば見られます)は意味がありません。ということは、すべての議論に、その議論が論題の是非にどのような意味を持つかを明らかにする必要があるということです。個々の論点に対応する「虫の目」と、その論点を論題の是非に結びつける「鳥の目」を、ディベートは必要とします。
- 5) ディベートは、立論・質疑・反駁という反論のシステムを持っています。そして、それぞれのステージの役割は決まっています。大まかに言えば、次のようになります。立論は、基本的な主張を総て述べます。肯定側と否定側のそれぞれの立論は、相互に外在的な反論になっています。質疑は、立論で述べられた根拠を、さらに詳しく相手に尋ねるところです。反駁は、主張を支え

る根拠を内在的に反駁する場です。ですから、ディベートは、個々の反論(議論)の性格を自覚しやすくなっています。

- 6) ディベートは、4)と5)の意味で、反論(議論)を体系的に組織する議論のシステムです。このシステムを通して、ディベートは、議論の構造を整理する力を育てます。
- 7) 「誠実に聞き的確に反論する」ためには、議論の構造を把握し、自分が何を話すべき番なのかを自覚することが必要です。

ディベートの魅力

- 1) ディベートが強くなっても、そのこと自体に大きな意味はありません(賞金を稼げるような時代がいつか来るかもしれませんが)。ディベートを通して身につけた力を、日常の討論や学習に生かすところにディベートの教育的意味があります。
 - 2) ディベートは、主張ではなく根拠に目を向けます。ディベートは、つねに異論(別の議論)を想定しています。こういう意味で、ディベートは、実は、学習そのもののモデルであるということができそうです。学習とは、権威に頼らず、自分の頭を使って考えることだからです。実は、一人で頭の中でディベートすることが「考える」ということです。
 - 3) ディベートは、素人(専門家でない人)が社会的判断を行う方法を教えるものです。ディベートは、異論を想定するという思想的態度を育て、社会的判断の基礎的な技術を提供するという意味で、民主主義を支えるものであると言ってもいいでしょう。
 - 4) 話を広げすぎました。ディベートをするようになったら夫婦喧嘩がなくなった、という友人がいます。どうしてかと言うと、この友人、いつも奥さんに言い負かされていたそうです。そうすると、ろくに話も聞かず、「うるせー」と怒鳴ってしまう。ところが、ディベートを始めてから、奥さんの言うことがよく理解できるようになるわけです(ディベートは聞くことが上手になりますから)。面白いもので、よく聞いてみると、奥さんの話にも、わりと論理的矛盾や飛躍のあることに気がつくようになるわけです。初めて「君の言うこともわかるけど、この点はおかしい」と言ったときは、奥さんも驚いたそうです。
 - 5) ディベートというゲームは楽しいものです。論題について調べることは、実に楽しいものです。目的のあるリサーチだからです。自分の議論を作ることは楽しいものです。反論を意識しながら自分の論理を構築するわけですから。議論をつくとそれを支える資料がほしくなります。この資料がほしいと思っていて見つけた時の嬉しさは測り知れません。それより何より、たとえば4分間の反駁を前にした準備時間の緊張感には痺れます。この緊張感の魅力に取りつかれると、ディベートから離れることができなくなるようです。
- どうかディベートの面白さを、体験してみてください。